

アゴラ エグゼクティブのための知的情報誌

The Magazine for JALCARD Members

JAL

Agora

第16巻第7号(毎月1回27日発行) 2006年6月27日発行
1991年7月10日 第3種郵便物認可

July 2006

7

Agora Special

Cosmopolitans

陽光と闇の神秘 クリストファー・遙盟



(財)国際文化会館
戦後復興期、海外との文化交流を行う拠点として1952年に創設。今春、建物がリニューアルされ、さらなる活動が期待されている。東京都港区六本木5-11-16。
<http://www.i-house.or.jp>



プラハ
チェコ共和国・首都。「ヨーロッパの魔法の町」「百塔の町」などと称され、街全体が世界文化遺産に指定されている。

Christopher Yohmei

クリストファー遙盟

尺八奏者

日本を訪れて、すでに30年あまり。クリストファーは琴古流尺八の師範として、門下生の指導や演奏活動のみならず、国内外での邦楽の普及に尽力している。「邦楽は全世界の財産である」という彼の哲学には、日本の伝統文化の進むべき方向性が示されている。

カラツ風を思わせるカサイキ、感情とともに爆発的な音を奏でるムライキが織り交ぜられる。竹に穴を五つ空けただけのシンプルな楽器から響きわたる調べは、聴く者を無限の空間で包み込み、不思議な陶酔感へと誘う。

尺八奏者・クリストファー遙盟が奏でる演奏には、国の違いを超えた普遍的なものがある。「邦楽は日本発の音楽だが、日本でしか通用しない伝統文化ではない。むしろ、全世界・人類全体の財産である」と主張するクリストファーの哲学そのものが、演奏となって響いているかのようである。

日本の伝統文化がもつ普遍性。クリストファーが日本で歩んできた三〇年あまりの道のりは、「日本人が日本の良さを知らなすぎる」ことへの苦悩でもあった。

管楽器に親んでいたクリストファーもまた、日本の伝統楽器を学びたいという希望をもっていた。大学の窓口で「尺八を学びたいのですが、良い師匠はいますか」と尋ねたクリストファーが紹介されたのは、現代邦楽に力を注ぎ、尺八の世界で活躍していた人間国宝の故・山口五郎であった。

「さっそく山口先生のもとで、週一回、尺八の稽古を受けるようになったのですが、楽器の演奏そのものよりも、教わり方や組織の複雑さに戸惑いました」

クリストファーは、「カタチ」と「ナイヨウ」という言葉をよく口にしている。アメリカから来た若者にとっては、尺八を演奏したいという「ナイヨウ」を求めての入門であったが、日本の伝統文化は、家元制度をはじめ、何よりも「カタチ」を重視する世界であった。受講してもしなくても同じ金額の月謝、門下生のタテ社会など、戸惑いは少なくなかった。

しかし、一カ月、二カ月と習っていくうちに、クリストファーは「カタチ」がもつ重要性を理解できるようになったという。太古から

東京都内の住宅地に囲まれた回遊式の日本庭園。周囲の喧噪とは隔てられた静かな空間には季節の草花が咲き、時折、人が訪れては散策を楽しんでいる。そんな庭園の一角にたえずむ和室から、そよ風に乗って、なんとも心地良い尺八の音色が響いてくる。

抑揚を利かせた演奏の中には、

クリストファーが初めて日本を訪れたのは一九七二年、交換留学生として、東京の大学で学んだ。七〇年代、日本へ留学する学生は、純粋に日本の文化に興味をもっていた者が多く、小さい頃からトロンボーンやフルートといった

岩崎貴彦(編集部)=文
Text by Agora
萩原美寛=撮影
Photo by Yoshihiro Hagiwara

日本の伝統芸能で求められる「カタチ」

クリストファー・ようめい

本名クリストファー・ブレイズデル。1951年、アメリカ合衆国テキサス州出身。琴古流師範。72年、交換留学生として早稲田大学に入り、竹盟社宗家・山口五郎に師事。78年、国費留学生として東京芸術大学大学院へ入学。82年、修了。84年、山口五郎より号「遙盟」を授かる。尺八奏者、指導者として日本国内のみに限らず世界各国で活動する。87年より、(財)国際文化会館の芸術監督に就任。89年より、朝日カルチャーセンター・東京(新宿教室)で、「琴古流尺八」講座を担当。97年～2002年、英字新聞「ジャパンタイムズ」の邦楽記事を担当。2001年より、国際基督教大学非常勤講師、テンブル大学非常勤講師を務める。合気道二段(合気道小林道場)。東京都在住。



上:尺八をはじめ、さまざまな国や地域の笛を集めている。下:縦書きに書かれた琴古流の楽譜。

<http://www.yohmei.com>

Christopher Yohmei
COSMOPOLITANS
162

受け継がれ、高められてきた日本の伝統文化では、その過程で無駄なものもそぎ落とされ、最も効率よく、目的に達することができるように「カタチ」ができあがっている。だから、伝統文化を学ぶ上で「カタチ」は力強い道具となり、想像力を豊かにする。その一方で、意味のない形骸化をしてしまった「カタチ」もある。日本の伝統文化にはこの両極が存在し、これらを見極めなくてはならない。

尺八の奥深さと、日本の伝統文化の素晴らしさを知ったクリストファーは、一年間の留学を終えていったん帰国。その後、再び来日して、東京芸術大学大学院に入学し、山口五郎のもとで本格的に尺八の修業に打ち込んだのであった。

「かつての日本社会では、西洋音楽が上で、邦楽が下。いわゆる教養人と呼ばれる人たちは、邦楽の価値を認めようとしなかった。だから、大半の日本人は尺八の価値も、なぜ自分が尺八を学ぼうとす

るかも理解しようとしなかった」尺八を学んで一〇年以上経った八四年、クリストファーは山口五郎から号「遙盟」を授かり、師範となった。しかしながら、尺八をはじめ、邦楽を取り巻く日本社会の認識は相変わらずだった。

当時のエピソードに、こんな話がある。ある日、クリストファーは知人からホームパーティーで演奏してくれないかと頼まれた。聞くと、高等裁判所判事の自宅で開催されるパーティーということ、演奏家にとつても、尺八の素晴らしさを伝えるためにも絶好の機会だと思いき受け付けた。尺八と演奏のための正装羽織袴を用意して、自宅に伺ったクリストファーだったが、張り出されてあったプログラムに目を通すと、モーツァルトやベートーヴェンの曲ばかりで、どこにも尺八は書かれていない。いぶかしく思いながらも、主催である判事の息子をつかまえて、「着替えをさせていただく部屋はありますか」と尋ねると、「なぜ、そん

な大層なことが必要なのか」と言われた。そこで、クリストファーは「コンサートにふさわしいように、正規のプログラムと正装を用意してきました」と応え、相手は「冗談でしょう。正規のプログラムだったら西洋音楽のことですよ。私たちが考えていた尺八というのは、コンサートが終わってから、お客様が食事などをされるときの余興にでも吹いてくれればいい」と言い放ったという。

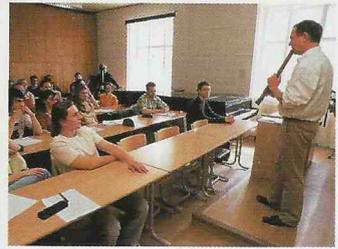
憤慨し、その場で荷物をまとめて立ち去ったというクリストファーだが、こうした邦楽に対する日本社会の態度に何度も出くわし、演奏家のみならず、伝道者としての使命を抱くようになっていった。「大人たちは西洋音楽への偏見があつて、邦楽を正しく理解しようとしません。だから、日本の音楽教育そのものが西洋へ偏っている。固定観念をもっていない子供のうちに、邦楽の素晴らしさを伝えなくてはいいないと実感しました」このように痛感したクリストフ

左ページ(上):18年間にわたり、朝日カルチャーセンター・東京(新宿教室)で「琴古流尺八」講座を担当しているクリストファー。(下)国際文化会館で開催された「雅楽の夕べ」。司会者として、邦楽の歴史や楽器について分かりやすく解説する。

※朝日カルチャーセンター・東京(新宿教室)＝東京都新宿区西新宿2-6-1・新宿住友ビル4階。tel.03-3344-1947(生活科)。
<http://www.acc-web.co.jp/sinjyuku>

図藝実力アップコース
講座終了後に対談を聴か
れる方は、アウティングに参
加後にもご利用下さい。
(土)12:30-16:00





上：ブラハ市内の大学で、尺八の歴史やその魅力を講義する。左：ブラハ在住の尺八奏者であり、大学教授でもあるマトウシェク氏を中心に活動している尺八サークル。チェコ日本友好協会ですら毎週開かれている講習会に、特別講師と参加する。

アーは、東京芸術大学で師事した民族音楽学者の故・小泉文夫の協力を得て、東京都内の小中学校を回り、尺八の演奏をする尺八行脚を始めた。

当初、「うちの生徒は邦楽のよくな難しいものは理解できませんよ」と、断つてくる先生もいたが、いざ蓋を開けてみると、子供たちは初めて生で聞く尺八の音色に多大な興味を示してくれた。「なぜ、一本の竹からあんなにいろいろな音が出るの?」「邦楽を初めて聴いたけど、なかなか良かった」「僕も尺八を吹いてみたい」など、純粋に邦楽を評価してくれた。

「おもしろいのは、校長先生をはじめ、先生のほうが、自分の生まれ育った国の音楽を知らないという恥ずかしさが先立って、邦楽を素直に受け入れられないのです。また、日本では音楽のジャンル分けが慢性化しているから、西洋のクラシック音楽を楽しむ人は、滅多に邦楽を聴こうとしません。教

育の現場である学校のこうした偏見の構図は、実は日本における社会全体の構図にもなっています。海外文化について多くの知識をもつことは大事ですが、それと同時に自国の文化についてもきちんと知らなければいけないのではないのでしょうか」

日本では、人に会うとまず年齢を尋ねることが多い。これは世代ごとに、同じような物の見方、考え方、体験があり、暗黙の共通認識があるためだといわれる。世代間を超えて、知識を伝えていく教育現場。そこで見た邦楽への軽蔑。こうした経験からクリストファーはその後、小中学校での尺八行脚をはじめ、邦楽への偏見がない海外での公演など、邦楽の素晴らしさを伝えるための活動を、積極的に行うようになっていった。

世界文化遺産の街・ブラハの一角、ウルタヴァ川沿いにある小さな教会には、尺八の演奏を聴こう

と、五〇人ほどの聴衆が集まっていた。

日本の伝統文化が海外で高く評価され、愛好者の多いケースはしばしば見られるが、ここブラハでも数十人が参加する尺八サークルが活動を行っている。西洋楽器とは異なり、自然の中にある竹をそのまま用いた尺八は、自国にはない素晴らしい音楽として、チェコの人々にも受け入れられている。

今回、クリストファーは日本チエコ友好協会の招待を受け、尺八指導と邦楽の啓蒙、さらにはコンサート開催のために、日本の連休を利用してブラハを訪れた。

「海外で邦楽を普及する活動は、とてもやりがいがあります。何よりも日本人のような邦楽に対する偏見をもっていませんから、音楽としての素晴らしさを素直に受け入れてくれますし、西洋音楽とは異なる新鮮さが人々を魅了するのだと思います」

これまで、世界各国でさまざま

Christopher Yohmei
COSMOPOLITANS
162

左ページ：ブラハ市内にたたずむゴシック建築の教会で開催されたコンサート。尺八の演奏を聴きに、多くの聴衆が集まった。



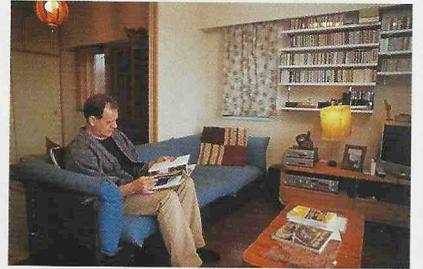


ご購入以外の試し吹きは、
断くお断りいたします。
Spring instruments testing
is for serious buyer only.

お祭り雑子
2008年4月より個人レッスンスタート
楽しみながら実演の体験へ！

右ページ：東京都内・目白駅近くにあり、尺八をはじめ、篠笛などを扱っている「目白」。古くからの付き合いで、顔なじみの主人・三浦氏と談笑する。

※(株)目白=東京都新宿区下落合3-17-30。tel.03-3950-0051。
<http://www.mejro-japan.com>



大学講師、芸術監督、演奏などで多忙な日々を送るクリストファー。

真の国際人になるために

Christopher Yohmei
COSMOPOLITANS
162

な活動を行ってきたクリストファー。プラハでは一般の大学を訪れ、音楽に関心のない学生も多い授業の教壇に立った。その講義で、西洋の楽器とは異なる尺八のシンブルさ、学生たちが当たり前のことと思いついて入っている西洋音楽との演奏方法の違いなどを、日本の歴史や文化的な背景を交えて分かりやすく解説し、締め括りに見事な演奏を披露した。初めて聴く尺八の音色に学生の心は奪われ、一時間半を超える授業はあっという間に終了した。

また、ゴシック建築の教会を舞台に行われたコンサートには、尺八サークルの参加者やチェコの音楽関係者など、多くの聴衆が訪れ、洋の東西を超えたコラボレーションに酔いしれたのだった。

「私は外国人でありながら、尺八

の世界にいるわけですが、外側にいる客観的な立場だからこそ見えるものがあります。日本の良さも悪さも分かるし、同時にアメリカの良さも悪さも外側にいるから分かります。つまり、どんな国、どんな文化でも、客観的な視点で判断することが重要なのです」

これまで日本は、西洋文化を積極的に取り込み、ある意味では西洋諸国よりも客観的に判断できる視野をもっているのかもしれない。しかし、その一方で自国の文化に対しては、あまりにも知らなさすぎる。日本人が真の国際人になるためには、クリストファーが指摘するように、今こそまず自分自身を知ることから始める必要があるのではないだろうか。

クリストファーによると、「遙盟」という号にある「遙」という文

字には、若き日、はるばるアメリカから日本へやってきた、自分の姿が込められているという。しかし、かつては遠く感じていたアメリカと日本の距離だが、「邦楽は全世界の財産だ」と悟った現在では、たいして離れてはいないと感じていた。西洋と東洋、月と太陽、陰と陽など、遠く離れていると思われているものの距離を縮める、それが自分に課せられた役割だと実感しているという。

「日本にいる限り、現在進行形の文化の担い手でいたい」

クリストファーの遙かな旅路は、これからもまだまだ続いていくようである。(敬称略)

萩原美寛(はぎわら・よしひろ) 写真家。一九五九年生まれ。海外での撮影を数多く経験。フオトルポルターシュ、ポトレートを中心に、雑誌やウェブなどで活躍している。

お母さんを育てる お母さんがいます。



自閉症の子を育てた経験を活かして、たくさんの方の電話相談に応じている江口寧子さん(46歳)

ベアレントメンター 自閉症相談員養成講座

自閉症の子を持つ親が気軽に相談できる電話相談室。日本財団は、その相談員の養成を支援しています。自身、自閉症の子を育てた経験を持つ親が、その経験を活かしてよき話し手を務めることで大きな効果が期待されています。

(社)日本自閉症協会 ☎03-3545-3380

 **日本財団**
The Nippon Foundation

日本財団は、総額の売上金の3.3%を財源に公益活動を推進しています。
<http://www.nippon-foundation.or.jp/>